

Google Forms を用いた頻度の高い授業評価による 授業活性化に向けた取り組み

土本 康生¹⁾

1) 横浜商科大学 経営情報学科

tsuchy@shodai.ac.jp

One trial for activation of the lecture by small and frequent class evaluations using Google Forms

Yasuo Tsuchimoto¹⁾

1) Department of Management and Information, Yokohama College of Commerce

概要

Google Form を用い、学期にわたり全ての授業で授業評価を実施し、学生から授業に対するコメントや意見を頻繁に入手するようにした。それによって授業を軌道修正することで授業の活性化を狙った。この取り組みを横浜商科大学経営情報学科で実施し、同大学の他の授業よりも高い評価を得ることができた。

1 はじめに

従来、大学における授業評価は全 15 回の授業が終わる頃に実施されるので、教員が学生からのフィードバックを得るのは全ての授業が終了した後になる。つまり、学生からの授業に対するコメントや意見を授業に反映できるのは、その授業が次に開講される一年後になってしまうのが一般的である。しかし、新しい授業を開講する場合や新しい大学で授業する場合等、それらの情報が全授業が終了してから集められたとしても今まさに履修している学生に還元されることはなく、学生の希望と実施される授業との間にミスマッチが生じたまま全授業が終わってしまうことになる。その問題を解決するために、もう少し細かな粒度で授業を改善する必要があり、頻繁に授業を評価することが求められる。そこで、学期にわたって全ての授業で授業評価することとし、その手法を「全授業評価」と呼ぶこととした。

近年、Google が提供する Google Forms を利用することで、誰もが簡易にアンケートを取る環境が整った。この Google Forms を用いることで全授業評価を実現した。それにより、学生の意見をより細かな粒度で集めることに成功し、授業を動的に変化させることで授業を活性化させた。本論文では、その全授業評価の取り組みについて述べる。

2 Google Forms

Google Forms は、Google が提供するクラウド型グループウェア G Suite を構成するツールのひとつで、ウェブ技術やプログラミングなどの特定の技術を理解していなくてもウェブブラウザ上で自由記述、多肢選択等の調査を実施できる。Google Forms を使うには Google の利用アカウントが必要だが、大学で利用するにあたっては無償で利用できる。調査結果のデータは、表計算アプリケーションである Google Spreadsheet 形式で保存されるとともに、ウェブブラウザ上でグラフとして確認できる。

3 授業評価項目

授業内容に対する学生の意見を授業に反映するためにはある程度の評価項目が揃わなければならない。しかし、授業評価を毎回行うことから、学生への負担と授業時間を少なからず消費してしまうといった影響を考え、確認する項目は必要最低限のものに絞った。学生には下記に示す 5 項目に対して回答してもらうこととした。

- ・ 授業の難易度の確認 (5 段階)
- ・ 授業の面白さの確認 (5 段階)
- ・ 一番興味深かった学習項目 (自由記述)
- ・ 一番面白くなかった学習項目 (自由記述)
- ・ 疑問点やわからないこと (自由記述)

まず、学習項目のレベルと学習者のレベルが一致しているかどうかの確認が重要である。次に、学習項目が学生が興味を持つものであったかどうか、興味を持ってもらえるように伝えられたかどうかの確認も必要である。これにより適切なレベル設定と内容の担保を目指す。また、学習内容に対する興味を具体的に確認するために、興味深く感じた学習項目と面白くなかった学習項目を自由記述形式で記してもらったこととした。それにより、個別の学習項目に対する学習者の興味を確認できる。そして最後に、授業内で質問できない学生の疑問や質問を拾うことを目的とした項目も用意した。

4 全授業評価の実施と授業への反映

4.1 全授業評価の実施対象科目

今年度、新任教員として着任した横浜商科大学経営情報学科において新しく授業を担当した5種6コマの授業のうち、他の教員と共同で担当する初年次教育科目を除く2種3コマで全授業評価を実施した。実施した科目は、同時期に2コマ開講される1年生向けの学科必修科目の「経営情報学1」で、履修者がそれぞれ145人と61人であった。また、3年生以上が履修する学科選択必修科目「インターネット技術演習」の履修者は30人であった。

4.2 授業評価の実施

全授業評価は、1回目から14回目まで全ての講義の最後に実施することとした。次回へのフィードバックが不要な15回目の授業については、大学が実施する授業全体の授業評価に代えることとした。

当日の講義の進度により余裕を持って5分程度の記入時間を設けられる時もあったが、講義終了後に慌ただしく後での記入を学生に促すような時もあった。

4.3 評価結果の公開

記入された学生からの評価については、次回の授業で必ず公開した。図1に示すように授業で利用するスライド資料で学生に調査結果を提示し、学生の授業に対する評価の推移を伝えた。また、自由記述形式で確認した興味深かった項目と面白くなかった項目については、多くの学生が記入した目立った意見や少数ではあるが特徴的な意見をそれぞれ取り上げつつ、スライド資料で示した。学生からの質問についても同様に提示した。それ

により、先週の授業内容を効率よく復習できる状況を作り出した。

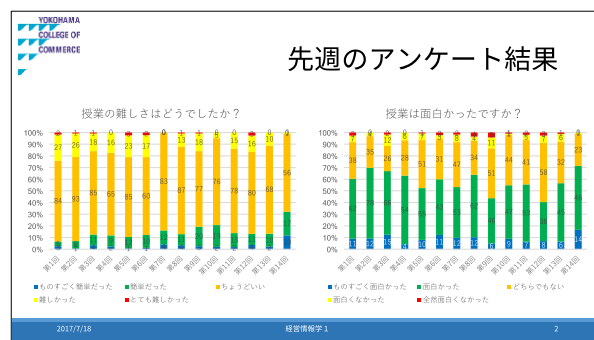


図1 授業の難易度と面白さの開示手法

4.4 学生コメントの授業への反映

授業そのものに関する内容

科目「インターネット技術研究」において、授業内で計算が必要となってくる第4回の授業のコメントとして「おもしろくなかったわけではなく、数字がたくさんあって理解するには時間がかかるなど個人的に思いました。」「急に数学的になって難しかった」(原文ママ、以下同様)という記載があった。それに対し、第5回の授業で復習の時間を長めにとり学生の理解を促すようにした。その結果、第5回の授業評価に「前回の内容をより分かりやすく説明していただいたので授業を受けていてわかりやすかったです。」と言ったコメントが残された。

また、科目「経営情報学1」において学習内容の理解が十分でないコメントが多数残されているように見受けられたので、第9回の授業にて復習の機会を設けたところ、好意的な意見が多数でた。「先生が学生のために復習をしてくれたこと、先生の復習で今までやってきた授業がわかってきた。」「今迄に出題された課題を、丁寧な解説によって振り返ってくれたこと」「前回までの授業の内容の確認をしてくださったのできちんと分かっていたところがありました。」(全て経営情報学1第9回コメント)

加えて、授業内で業界の最新動向や仕事の現場の現状を紹介した回では、その点に興味を持った学生のコメントが多数みられた。そこで、継続的にそのような情報を授業内で紹介するようにした。「なぜ編集のプロはスマホを否定するのか」「編集者の視点から見たスマホでできる事」「雑誌編集の話です。」(全て経営情報学1第4回コメント)「Amazonが実はオンラインショッピングより

も仮想コンピュータの事業で儲けているというのは知りませんでした。」「Amazon が e コマース以外で稼いでいたこと」(全て経営情報学 1 第 6 回コメント)

授業環境に関する内容

授業環境に関するコメントも残してくれたケースがあった。100 人を超える人数で開講された経営情報学 1 のクラスにおいて、第 2 回の授業コメントとして「面白くないことはなかったです。ですが、マイクのほうがいい気がします。」という記述があった。これに対してマイクを使用したところ、第 3 回の授業コメントとして「プログラムや確率の話、特に自分が興味のあるゲームと絡めてくれたのは面白かったしマイクを使って聞いてやすかった」とマイクの利用を好意的に解釈するコメントが残された。

5 授業全体を対象とした授業評価結果

全授業評価の実施した結果を、大学で公式に行われている授業評価 [1]を用いて評価する。大学で実施している授業評価の中から、特に授業内容と評価に密接な関係がある以下に示す 4 項目を選び、本論文で実施した全授業評価と比較した。

- ・ この授業の難易度は適切だ
- ・ 教員は学生の理解を深めるための配慮・工夫をしていた
- ・ 教員は学生とのコミュニケーション（口頭やインターネット上で質問を受ける、ディスカッションの機会を設ける等）に配慮していた
- ・ 総合的に判断してこの授業に満足している

5.1 難易度に関する評価

図 2 に示すように、全授業評価を用いて難易度の調整を図ったものの、授業全体では他の一般科目との著しい差は見られなかった。これは、後の第 6.1 節で挙げるように難易度に気を遣いすぎて簡単すぎる授業になったのが理由だと考えている。

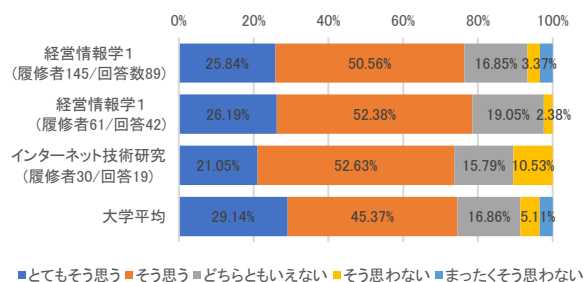


図 2 この授業の難易度は適切だ

5.2 教員の配慮と工夫に関する調査

図 3 に示すように、全授業評価は学生の理解を深めるための取り組みとして、配慮や工夫があったと評価された。「とてもそう思う」と「そう思う」を加えた大学平均の 75.42% に対し（以下同様）、細かなフィードバックを可能とした全授業評価を実施した科目は、2 種 3 科目とも上回った。一部のクラスでは 13% を超える高評価を得られた。

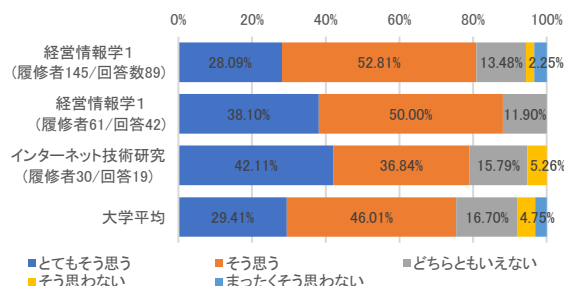


図 3 教員は学生の理解を深めるための配慮・工夫をしていた

5.3 教員と学生とのコミュニケーションに関する調査

全授業評価を実施したことで学生とのコミュニケーションの機会が増し、質問や授業に関する情報を多く入手できるようになった。それにより学生へのフィードバックを細かく実施できるようになり、学生にとって教員がコミュニケーションを積極的に取ろうとしていることが伝わったのだと思われる。図 4 に示すように、大学平均では 71.63% だが、全授業評価を導入したいずれの科目も評価が高く、インターネット技術研究においては 13% 近く高い評価を得られた。

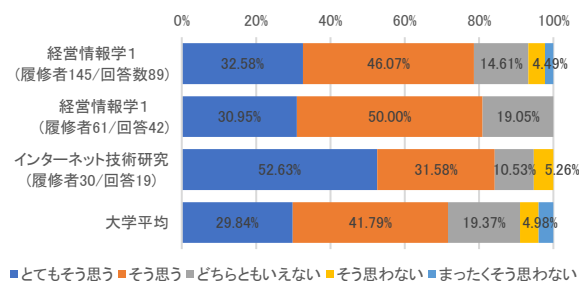


図 4 教員は学生とのコミュニケーション（口頭やインターネット上で質問を受ける、ディスカッションの機会を設ける等）に配慮していた

5.4 授業全体の満足度に関する調査

最後に授業全体の満足度に関する調査結果を大学平均と比較する。図 5 に示すように、大学平均の 78.81% の評価に対し、いずれの科目も平均を上回る評価を得た。全授業評価を導入することで、

授業全体の満足度を上げることができた。

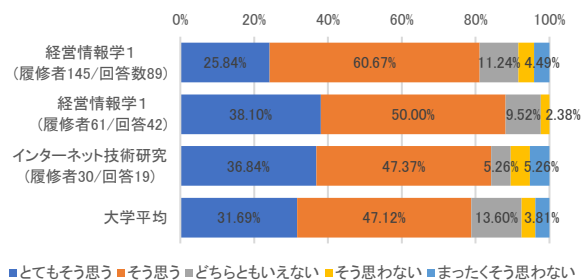


図 5 総合的に判断してこの授業に満足している

6 全授業評価の問題点

6.1 難易度の調整に関する問題

全授業評価を実施し学生の授業に対するコメントを翌週にフィードバックする本手法は、難しいという意見が出すぎた時に安易にレベルを下げる方向に向かうという最大の問題がある。第 5.1 節で述べたように難しすぎると言った学生の意見に従って授業内容のレベルを下げた場合、十分に理解している学生は逆に授業に対する不満を持つ可能性がある。科目「インターネット技術研究」ではこの問題が発生し、一部の計算が苦手な学生に合わせて授業をした結果、理解の早い学生にしてみると難易度の設定が適切ではなかったという評価になったと思われる。

同様に授業の復習に関しても復習が必要な学生とそうでない学生の間で評価が分かれることとなる。第 4.4 節に示すように復習に好意的なコメントが残される一方で、「今日は今までの復習だったが、新しい事があまりなく少し退屈だった」(経営情報学 1 第 8 回) というようなコメントも残されている。

ただし、この点については、そもそもの授業計画が学生のレベルに適合していないという根本的な問題であり、全授業評価による授業レベルの調整で解決できなかった可能性も否定できない。

6.2 匿名性に関する問題

Google Forms を利用した全授業評価の実施には、記入データから記入した本人が特定できてしまうといった問題が存在する。ひとりが何回も授業評価に答えないようにするために、Google Forms の機能上の制限として記入されたデータとともにメールアドレスを記録されてしまう。本来、授業評価は匿名で行われるべきであり、それにより学生は授業に対する評価を率直に記せる。Google Forms を使う場合、この点で問題が生じる。今回の

授業では、学生と教員との信頼関係のもと、メールアドレスから学生の名前を検索しないことを教員側から約束し、学生にはそれを信じてもらい全授業評価をしてもらった。

7 結び

Google Forms を用いて細かく授業評価を実施する全授業評価を提案し、実際に授業で利用した。その結果、学生から粒度の細かな授業に対するコメントや意見を入手でき、授業を頻繁に改善できた。それにより、学生の授業に対する総合的な評価が上がった。

なお、全授業評価には Google Forms が抱える授業評価者の回答が見えてしまうと言った問題が存在するので、今後はその点を改善する必要がある。

参考文献

- [1] 横浜商科大学 学生総合センター・IR 委員会、平成 29 年度春学期授業評価アンケート報告書、横浜商科大学、2017。